世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Other Historical Material on “Ashibeya” and “Imose Annex” at Wakanoura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 直子, 西本, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/396

和歌の浦「あしべ屋」と「妹背別荘」を巡る その他の史料

Other Historical Material on “Ashibeya” and “Imose Annex” at Wakanoura

西　本　直　子*
Naoko Nishimoto

西　本　真　一†
Shinichi Nishimoto

前言

あしべ屋について、いくつかの新たな資料が見つかった。ひとつは「あしべ屋」の２階建ての姿の写るガラス製スライド写真であり、平成27（2015）年に早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に収蔵されているものが発見された。この写真は鮮明なあしべ屋本店の姿を伝える二番目に古いものと考えられる。坪内逍遥は昭和初期に作られた俚謡「あしべ節」の選歌者として知られるが、明治42（1909）年に舞踏戯曲「和歌の浦」の台本を発表している。明治20年以降の逍遥の日記が一部出版されており、それによれば明治21年～45年にかけて大阪・京都に複数回、足を運んだ形跡がうかがわれ、和歌の浦についての記述は見られないものの、明治40（1907）年には和歌山市に立ち寄った記述がある。もうひとつは、郭邸（和歌山市今福）に保存されていた「米虫日誌」の中から、明治36（1903）年10月９日に皇太子があしべ屋妹背別荘に御光臨された際の記述が見つかった。

建物に関する新しい発見としては、奥座敷「西の間」の床脇の襖絵に落款が発見され、作者が梅戸在貞であることが判明した。また失われたと思われた建物の部分について、違棚の筆返しや高欄の地覆などの部材が建物の床下や天井裏から見つかった。さらに、あしべ屋妹背別荘の登記簿により、初代西本健次郎が大正11（1922）年６月１日にあしべ屋妹背別荘の建物の所有者となったことが知られた。昭和12（1937）年に、和歌山市出身の画家・大亦観風があしべ屋妹背別荘に滞在していたと推定される写真も見つかった。以上をまとめて報告する。

*工学部非常勤講師（建築デザイン学科）　† 環境研究所客員研究員

１、「芦辺屋」の２番目に古い写真の発見

平成27（2015）年夏に早稲田大学坪内博士記念演劇博物館にて開催された展覧会[1]で、東京大学工学系研究科・加藤耕一研究室の博士課程に在籍する大学院生・川津彩可氏により発見された[2]。平成24（2012）年に発見された明治10～20年代と推定される鶏卵紙写真（図１左上）の次に古いあしべ屋本店の姿を伝えていると考えられる（図２）。セピア調の画像に着彩が施された写真乾板の余白部に、反転した文字で明瞭に「紀州和歌浦　芦部茶屋」と記載がなされている。カメラを妹背山に置き、あしべ屋本店を正面から撮影した写真の左手には不老橋もが写し込まれている。

平成25（2013）年に行った名勝和歌の浦講座「近代の妹背山：あしべ屋妹背別荘について（明治・大正期を中心に）」[3]にて、当時、収集できた写真資料を整理した結果、あしべ屋本店の姿に

第１期：２階建てと平屋（溝端佳則氏蔵）

第２期Ａ：階段付の３階建てと平屋（溝端佳則氏蔵）

第２期Ｂ：正面中央に破風を備えた３階建てと平屋

第３期：正面中央に破風を上下二重に備えた２階建て

図１：あしべ屋妹背別荘本店の４つの姿

1　平成27（2015）年４月１日～８月２日「幻燈展：プロジェクション・メディアの考古学」展、展示ディレクション：斎藤達也。

2　川津氏は建築史を専攻されているが、芦辺屋の研究を進めている西本直子に連絡があり、知ることができた。

3　平成25（2013）年１月19日にあしべ屋妹背別荘にて西本直子が「玉津島保存会主催、第６回『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦講座』」で行った同タイトルの講演内容を纏めた配布資料。「名勝和歌の浦講座」、平成29（2017）年に所収予定。

4　収集したあしべ屋本店の写真資料を整理した結果、その姿を大きく３期に分けることができた。

は図１のような変遷が見られた[4]。

第１期：２階建ての平屋[5]

第２期Ａ：階段付き３階建てと平屋

第２期Ｂ：正面中央に破風を備えた３階建てと平屋

第３期：正面中央に破風を上下二重に備えた総２階建て

その後、「国華余芳」（明治13［1880］年）に２階建てのあしべ屋本店の姿を見つけることができ、明治12（1879）年におけるあしべ屋の第１期の状態が確認された[6]。

これまでの所見と、ガラス製スライド写真に見られるあしべ屋本店の姿とを照らし合わせたところ、次の６つの観点から幻燈写真の撮影時期は第１期と第２期Ａの間、明治26（1893）年以前と推測される。

イ．３階建てと平屋による構成。

ロ．３階建て部分の２階から、直接に地上へ降りる階段の存在。

ハ．正面中央の破風がない。

ニ．板塀であり、平屋との接続部分で塀が切れて道から直接出入りできる。

ホ．海に設置された架台はまったく見られない。

ヘ．第１期と比較して、平屋の建物の高さが一段高くなり、直接地上に降りる短い階段が加わっ

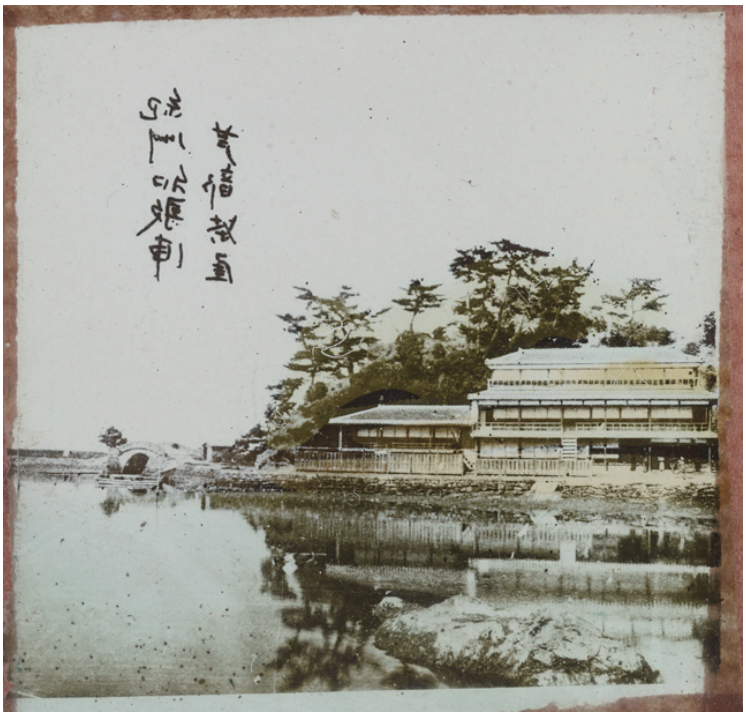


図２：あしべ屋本店のガラス製スライド（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵）

5　拙稿「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要３、平成26（2014）年、p. 107、図10。

6　拙稿「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要５、平成28（2016）年、p. 107、図3。

ている。また屋根が切妻型から寄棟形式に変わり、高欄が設けられている。

松の木が勢い良く枝を伸ばしている様子や、石積みの護岸と小さな桟橋がある様は、図１左上の２階建ての鶏卵紙写真と非常によく似ている。柴垣は板塀に変わっている。板塀はこれまで「紀伊和歌浦図」（明治26［1893］年）のあしべ屋本店の図で見られたが、写真資料で確認されたのはこれが初めてである[7]。２階からの階段が見えるが、中山昇三の「紀伊国旅の友」（明治32［1899］年）の広告で階段を消した痕跡があることから、この直前には階段はなかったと考えられ[8]、従ってこのガラス製スライド写真の撮影時期は、まずは明治32年以前と考えられる。次に、図１右上の写真と似ているが、ガラス製スライド写真には本店前の架台[9]が見当たらない。架台は、第１期から第２期Ａの間に作られた[10]。明治30年代初頭はあしべ屋本店の前に設置されていたが、明治32年以降に不老橋から片男波の間に移設されて、岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」（明治42［1909］年）などで３箇所あったことが確認されている。即ち、図１右上の第２期Ａの写真は明治30年前後のごく数年の間の姿を捉えていると推定される。図１右上と左下の第２期A、Bの２枚の写真から塀の意匠が引き継がれているので、ガラス製スライド写真は、第１期と第２期Aの間に撮影されたと推測される。季節は夏であろう。簾をおろした２階は中の様子が確認できないが、１階では総勢６人ほどが、船を待っているのか、縁台に腰掛けてしゃがみこんで連れ合いと話している人や、小上がりに腰掛けて、暑さから足をむき出しで組んでいる人、立っている人など、思い思いの様子が見える。

当初から平屋部分は静かで特別な場所であったと思われるが、図１左上の状態よりさらに床高を上げて見晴らしを良くし、高欄を廻して寄棟の屋根を掛け、建築形式も格上の意匠として、高級に改修されたらしいことが窺われる。「紀伊和歌浦図」でも同様の状態が線画により明瞭に確認できる。第１期と同様に、平屋との接続部分には塀を設けずに道から直接入れるようになっている。スライド写真では塀の切れ目から、平屋部分に地上から直接入れる階段が設けられていることが確認される。この塀の切れ目は、第２期以降は扱いに変化が見られる。Aは架台の影になって確認しづらいが、Bのこの部分を見ると、塀の切れ目に木戸が設けられている。第１期ではいわゆる茶屋建築らしく、道行く人が気軽に立ち寄れるように道と建物の内部空間がひと続きになっていたのであるが、営業形態の変化によってこれに問題が生じて、より内部空間のプライバシーを高めていく必要が生じたと考えられる。その後も、２階と地上を直接結ぶ階段が撤去されて、建物内部への入口を限定し、建築の内部と外部がはっきりと区画されていく過程が読み取れる。このように考えると、第１期と第２期Aの間にあって、平屋に地上から直接入れる階段が設けられたスライド写真の時期は階段の見られない「紀伊和歌浦図」の状態よりも外部との親和性が高く、その意味からスライド写真の状態が、「紀伊和歌浦図」よりも前の段階であったと考えられる。

7　拙稿「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要３、平成26（2014）年、p.108、図13。

8　拙稿「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要５、平成28（2016）年、p.108、図５。

9　用途は舟着場や休憩所とも言われるが、まだ明確にはなっていない。長坂雲在筆「和歌浦図巻」明治36（1903年）（和歌山県立博物館蔵）には不老橋を片男波の方に渡った岸辺に寄棟の屋根のある建屋が水上に建つ様が描かれている。

10　拙稿「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要３、平成26（2014）年、p.102。

川津氏の発見については平成28（2016）年6月29日の毎日新聞和歌山版に掲載された。なお、坪内逍遥博士記念演劇博物館のガラス製スライドコレクションのデータベース[11]から、観海閣の写真も見つかった。画像の余白に、「紀州　若之浦」の文字がある。観海閣のスライド写真を観察したところ、多宝塔への自然石階段を登った先に、「紀伊国名所図会」で見られる東門[12]を確認することができた。画面手前の量塊は亀岩と思われるが、その背後の懸造の観海閣の足元に、キセルを持ち、帽子を被ってしゃがみこみ、カメラに視線を向ける人物が見える。また、画面右端、現在の広場のあたりに、腕組みをして立つ男が海に視線を投げている。博物館ではこれらのスライドの入手経路や時期に関する記録が見出せず、現在、二人の男の身元は残念ながら判らない。しかし、この画像は妹背山を訪れた人物達の記念写真とも呼べるものであることは疑いがない。

逍遥は明治20（1887）年8月に大阪に滞在し、宇田川文海と会うなどしている。また明治40（1907）年には高野山から和歌山を経由して大阪に戻っている。明治43～45年は毎年大阪に足を運んで、関西に興味を持っていたことが判る。いずれも「中央公論804号」（昭和30［1955］年）、「坪内逍遥研究資料1, 13, 15」（昭和44［1969］年～平成10［1998］年）に公開された逍遥の日

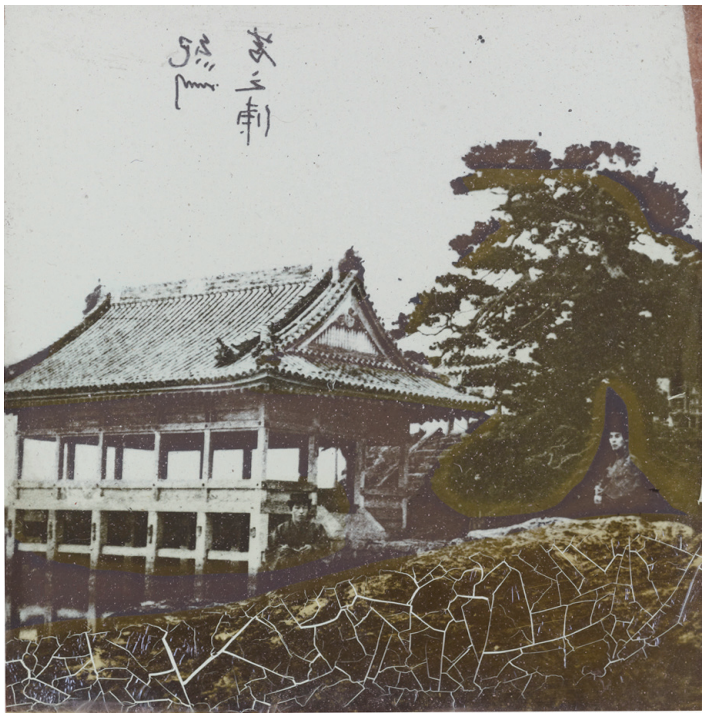


図３：観海閣のガラス製スライド（早稲田大学坪内逍遥博士記念演劇博物館所蔵）

記により判明した。

坪内逍遥については、あしべ屋が望海楼に接収されて以降、望海楼が作成した「阿し辺節」の

11　昭和３年の開館時に英国大使館から寄贈されたシェークスピア劇の画像や、演劇に関する幻燈スライドが集められているが、名所のスライドも一部集められていた。キャプションはないのであるが、和歌山の根上り松と思われる写真も見られた。

12　菅原正明「久遠の祈り」、p. 141 に描かれた東門と思われる。

パンフレットに坪内逍遥先生選歌と記され、関わりが知られていた。パンフレットには歌詞とともに「あしべ踊」を踊る芸姑たちの写真が添えられている。しかしなぜ逍遥が選考を行ったかについては定かではなかった。歌詞には当時の和歌浦がどのように認識されていたかが端的に示されていると思われるので、全詞を記す。

あしべ節[13]

（二上り）
トツテト、ツツツチ、チリトテチン
チリシヤンチリシヤン

いこらァ　連れもてョー　アーあの和歌浦へ　アラヒテノシヨ
阿し辺こひしや　夕涼み　夕涼み　＊ヨイヨイヨイヨイ　ヨイヤサ　（以下＊はこのフレーズ繰り返し）

和歌の浦にはョー　アー名所がござる　アラヒテノシヨ
御座れ阿し辺に　田鶴もいる　田鶴もいる　＊

阿し辺茶屋からョー　アー紀三井寺見れば　アラヒテノシヨ
曳きも寄せたい　花霞　花霞　＊

月が出た出たョー　アー紀三井寺山に　アラヒテノシヨ
君に見せたい　月が出た　月が出た　＊

月は朧にョー　アー塩釜けむる　アラヒテノシヨ
今宵逢瀬も　玉津島　玉津島　＊

思い三橋ョー　アーわたれば妹背　アラヒテノシヨ
逢うて千歳の　下り松　下り松　＊

阿し辺よいとこョー　アー妹背をちぎる　アラヒテノシヨ
ぬしと不老の　友白髪　友白髪　＊

イコラ連れもてョー　アー相合傘で　アラヒテノシヨ
雨もしっぽり　不老橋　不老橋　＊

五十五万石ョー　アー葵の御紋　アラヒテノシヨ
見たかご威勢の　和歌祭　和歌祭　＊

（二上り変手）
トンシヤシヤン、シヤラシヤン、シヤラシヤン

和歌の浦には　名所が御座る　御座れ阿し辺に　田鶴もいる

13　香川県立ミュージアム館蔵品データベースによる。収蔵番号：KPO#0056。「二上り変手」として、踊りに関する指示も書かれている。2014 年のあしべ屋妹背別荘の桜まつりでは、岩橋和廣氏の御協力により、愛唱された当時を知る歌い手さんの指導を得て披露されたが、これ程多くの歌詞の存在は知られていなかった。「和歌の浦学術調査報告書」（平成 22［2010］年）、p. 120 によれば芦辺屋経営者が昭和 4（1929）年にあしべ踊り・音頭を発表した、とあり、坪内逍遥作とされている。逍遥著「日本舞踊の現在及び将来」（明治 40［1907］年）に、大阪にあしべ踊の興行があったことが記されており、同一のものであるか、調査が望まれる。渡辺裕「日本文化　モダン・ラプソディ」（平成 15［2003］年）、p. 140 を参照。

＊アラヒテノシヨ　ツレモテイコラ　ヨイヨイヨーイヤナ　（以下＊は繰り返し）

阿し辺まわれば　塩竈さまよ　主の赤兒生む　願かけに　＊

あしの葉づれに　つひだまされて　様の舟かと　磯へ出る　＊

波もささやく　阿し辺の宿に　結ぶ夢さへ　月と花　＊

誰を松原　洲崎の千鳥　啼いて幾夜を　片男波　＊

松は根上り　強気で通す　妾しや弱気の　下り松　＊

恋し片男の　波打つ濱で　まてばおぼろの　月が出る　＊

一に権現　紀州の花よ　今も栄えを　三つ葵　＊

２、舞踏戯曲「和歌の浦」[14]

図４：レコードジャケットの参照元と思われる歌川広重の浮世絵
（嘉永６［1854］年～安政３［1856］年）

坪内逍遥は安政6（1859）年に美濃国に生まれ、明治16（1883）年に東京大学文学部政治科を卒業し、文学士となる。特に明治期に文学・演劇の改良運動に身を捧げ、「小説神髄」（明治18～19年）、森鴎外との「没理想論争」（明治24～25年）、島村抱月らとの「文芸協会」の設立（明治39［1906］年）、「新修シェークスピヤ全集」全40巻（昭和8～10年）の訳業など、文学史に大きな足跡を残した。明治22（1889）年には徳富蘇峰の依頼で「国民之友」に「細君」を発表し、

14　坪内逍遥「現代篇第一輯」（昭和４［1929］年）、pp.153-158。「新小説」、明治 42（1967）年２月号所収。「歌舞伎」、第３年第３号（昭和２［1927］年）、pp. 26-27。昭和 58（1983）年に東宝演劇まつりで上演された。「坪内逍遥研究資料 11」（昭和 59［1984］年）、pp. 112-114 を参照。

以降は小説執筆や評論をやめて演劇改良に専念する。当時、歌舞伎界で新時代の模索が始まっていたが、逍遥はこれに同調せず、日本古来の形式を活かしつつ捨てるべきは捨てて、日本の芸術を先進国の芸術と並ぶものにしようと独自の立場で努力を重ねていく。その活動の中で、一時期、舞踏に熱中する。明治37（1904）年11月に「新楽劇論」と舞踏戯曲「新曲浦島」を発表して以降、明治41（1908）年まで毎年、舞踏劇を執筆した。しかし明治41年に5編の新舞踏劇を書いて以降は舞踏に関する活動から一切の手を引いてしまう[15]。その最後の1編が舞踏戯曲「和歌の浦」である。逍遥著「それからそれ」（大正10［1921］年）では歌舞伎のテンポと様子を浮世絵になぞらえ、外国でもてはやされても我が国の現代の文化ではないことを訴えるなど、辛辣な意見が見られる。その中で「和歌の浦」に関する次の記述がうかがわれる。

「今頃は『半七さん』をヴァイオリンで弾いたり、『ほんに思へば』をピヤノに合わせたりするのは無理でもあり、無駄でもあるが、間奏だけなら、存外面白い新合奏が工夫し出されまいものでもない。（中略）比較的間奏沢山の、和洋合奏式の「和歌の浦」という一新曲を書いてみた。けれどもそれはただ書いてみただけで、まだ會て作曲させてみたこともないのだから、私の此予想は、どう甚しく裏切られまいものでもない。」

これを受けたか定かでないが、大正10（1921）年（11年の説もある）に箏曲家・中島雅楽之都（なかしまうたしと）の作曲を得て、同年5月に京都･中座で中村福助と坪内操により初演され、昭和2（1927）年3月に東京・歌舞伎座で中村福助と市川魁車により上演された[16]。中島靖子らの演奏を、昭和50（1975）年にビクターから発売されたレコードにより聞くことができる。収録時は十七弦や三絃、笙、打物、少年合唱隊も加わり、壮大なオーケストレーションとなっている。邦楽の間に西洋の角笛を登場させ、舞の間にバレエの要素を挟む指示がある。

台本冒頭に記された舞台設営の指示を見ると右側（上手）に白砂青松の砂嘴があり、岩に絡みついて生える生命力に満ちた松の姿など、三断橋を渡り妹背山に至る間に目にする和歌の浦の風景を想起させる描写である。

戯曲全体は3つの楽章からなる。主人公は雌雄の鶴である。第一部は、仙郷たる和歌の浦の風景をたたえ、手事（歌の間に挿入される、地歌や箏曲による間奏）があって舞が入る。第二部は、ここに暮らす人々の、舟遊び、波と千鳥、大漁祝い、道戯など、洋楽も混在する様々な歌や舞が挿入される。混沌とした中で童も漁師も乱舞する第二部で、その様子に驚きあきれた鶴が岩陰に身を隠していたが、第三部では、神々しい姿に変わって出て来る。時代と共に仙郷がくずれて行くのを嘆き、名残を惜しみながらも鶴は仙郷に別れを告げる。

レコードジャケットに印刷された解説文を書いた田辺尚雄（当時、東京音楽学会名誉会長・武蔵野音大名誉教授）は、自らの明治30年代の和歌の浦の記憶として、義太夫「三十三間堂棟木由来」の中の木やり歌「和歌の浦には名所がござる、一に権現、二に玉津島、三に下がり松、四に塩釜や」の歌詞で惹かれていた和歌の浦に、中学校の修学旅行で実際に訪れた時のことを次のように書いている。

15　逍遥がなぜ舞踏劇を続けなかったかについては、「坪内逍遥研究資料10」（昭和56［1981］年）、pp. 24-29に詳しい。

16　田辺尚雄「不朽の名曲と称せる師の処女作」（昭和50［1975］年）。

「…そのころは長汀曲浦、沖には片男波、海岸に塩やく煙の細く立ち昇る間には玉津島神社の塔が画のように飛び出している。その崇高な風景に目を奪われていた。ところが昭和に入ってからここを訪れる毎に少しずつこの名画が汚されて来て、殊に終戦後は無残な光景に涙を禁じ得ない。今この『和歌の浦』の歌詞は、坪内博士が私と同じ明治の中期の和歌の浦を賞して作詞されたものと思う。…」

逍遥が「和歌の浦」を作った契機は雅楽の舞台鑑賞[17]とされる。明治期の人の強みは日本固有の文化を体得していたことであろう。逍遥は日本古来の楽劇を「能」「歌舞伎」「振事（ふりごと）劇（常磐津、長唄など）」の三種と捉え、新しい楽劇を作るに際して、能は仏教的厭世観が強く、武家や貴族好みで「国宝」として保存すべきであり、歌舞伎は本来が俗世の楽しみのものであるから、高雅な要素や、斬新な感想を加えることは不自然であるとし、俗曲のうちで最も節まわしに癖のない長唄などを土台とすることを考えた。伝統文化を、自ら生きる時代に活かそうとする態度は興味深い。西洋文化を吸収しきれていない当時は困難[18]であったと推測される一連の舞踏劇の演者探しであるが、現代では見出すことができるかも気になるところである。

3、郭邸の「米虫日誌」に見るあしべ屋妹背別荘

郭邸（和歌山市今福。登録有形文化財）は、明暦年間に中国から帰化した名医・玄関を祖として代々紀州藩医を務めた医師の家系の第５代郭百甫が明治10（1877）年に築造した木造２階建

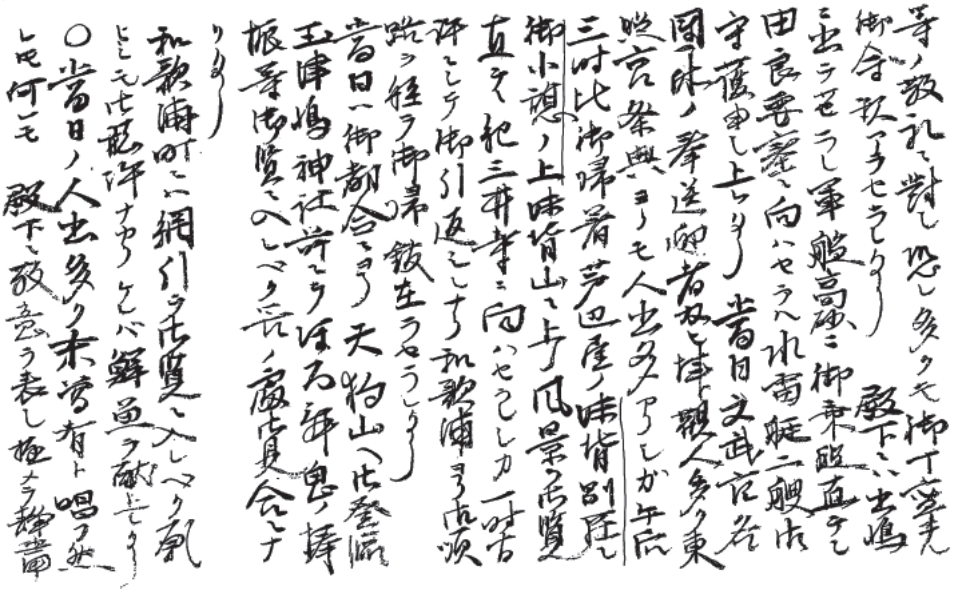


図５：「米虫日誌」、明治 36（1903）年 10 月 9 日の日誌に見られるあしべ屋妹背別荘に関する記述。傍線筆者。

17　吉田凞生「坪内逍遥と舞踏劇『和歌の浦』」（昭和 50［1975］年）。坪内雄蔵「作と評論」（明治 42［1909］年）にも雅楽の印象が書かれている。

18　坪内雄蔵「それからそれ」（大正 10［1921］年）、p. 290。発表当時、上演が困難であった様子が伺える。「歌舞伎」、第４年新春号（昭和３［1928］年）では松本金太郎が演者の視点から語っている。他に、渡辺裕「日本文化　モダン・ラプソディ」（平成 15［2003］年）、pp. 145-152 の記述がある。

て一部平屋の洋館建築である。現在、保存活動が行われているが、第６代・嘉四郎がしたためた日誌「米虫日誌」を調べておられる和歌山市在住の建築史家・西山修司氏から、平成28（2016）年９月にあしべ屋妹背別荘に関する記述が含まれていた点を御教示いただいた。

明治36（1903）年10月９日に、和歌浦へ当時の皇太子が行啓した様子を細かく記している。これまで明治36年の行啓については「皇室と紀州」（大正11［1922］年）や「和歌山史要」（大正４［1915］年）に、あしべ屋妹背別荘で後の大正天皇が休憩されたことが記されていたが、「米虫日誌」により当時の妹背別荘の設えなども詳しく知ることができる。玉津島神社前で和歌祭渡御の母衣や忠棒と思われる舞を御覧に入れようとしていたことも判った。同日午後5時から9時まで芦辺楼上（あしべ屋本店上階と思われる）で打上げの宴を行っていたこと、あしべ屋の50m程手前に妹背屋という旅館があったことなども記述されていた。「米虫日誌」の存在はこれまで知られなかったが、江戸期から明治期の和歌山を伝える資料として今後の解読が期待される。以下に図５の書き下し文を記す。

（前略）殿下ニハ出島ニ出ラセラレ軍艦高砂ニ御乗艦直チニ由良要塞ニ向ハセラル水雷艇二艘御守護申シ上ケタリ　当日文武官各団体ノ奉送迎者及ビ拝観人多ク東照宮祭典ヨリモ人出多アリシガ午后三時此御帰着　芦辺屋ノ妹背別荘ニ御小憩ノ上妹背山ニ上リ風景ヲ御覧直チニ紀三井寺ニ向ハセラレシカ一時間許ニシテ御引返シニナリ　和歌浦ヨリ御順路ヲ経テ御帰館在ラセラレタリ　当日ハ御都合ニヨリ天狗山ヘ御登臨　玉津島神社前ニテほろ舞鬼ノ棒振等御覧ニ入レベク長ノ處御見合ニナリタリ（後略、傍線は筆者）

４、奥座敷「西の間」の襖絵と「東の間」の床の部材

西の間の床脇には金砂子で襖絵・壁貼付絵が描かれている。平成24（2012）年当初は襖が入れ替わるなどしていたが、改めて襖を入れ替えたところ、全体で山水が描かれていることが再確認された。さらには平成28（2016）年７月に和歌山県教育委員会生涯学習局文化遺産課、和歌山市教育委員会生涯学習部文化振興課の方々により、小襖の右隅に落款が発見され、大正昭和期

図６：床脇

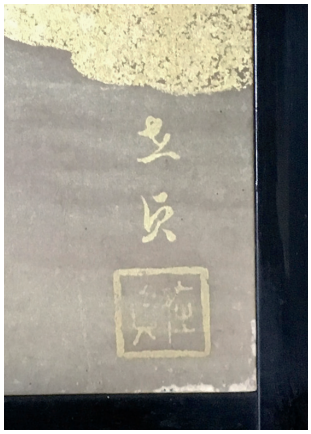


図７：落款

19　和歌山県立近代美術館学芸員・藤本真名美氏の御教示による。

に活躍した日本画家、梅戸在貞（うめとざいてい）の筆による可能性が高いと判明した[19]。在貞は原派の祖・原在中の子孫で、大正4（1915）年に天皇即位式に際して描いた麒麟鳳凰図が代表作とされる。金砂子が面的に用いられ、西の間の奥に光を導いている。床板や框などは透明感のある暗褐色の漆塗である。

平成25（2013）年に、本来は東の間の床脇に存在していたと思われる違棚と筆返しの造作部分と、夏用の建具1本が、床下に放置されているのが確認された。葦の茎と思われる植物の細い茎を寄せて簀の子状にした面材が張られた建具は季節により障子と入れ替えていたと思われる。図8は本来の床脇の姿を写したと思われる絵はがきである。昭和30年代の写真にも床脇が写真に収められており、床下で見つかった筆返しと同様の形が確認された。また、平成28（2016）年4月の桜まつりの準備のために掃除を行っていたところ、西の間脇の廊下の天井裏に、高欄の地覆と思われる部材などが複数収められているのが見つかった。西本家ではこれまで高欄を取り外した記録はない。拙稿（平成26［2014］年）にて、これまでの資料の観察と奥座敷西面の柱に高欄と照応する高さに使用された形跡のある仕口の加工痕が発見された点から、奥座敷全体が大正2～6年の間の移築であることを報告した。これらは発見された仕口に収まっていた部材である可能性も考えられる。

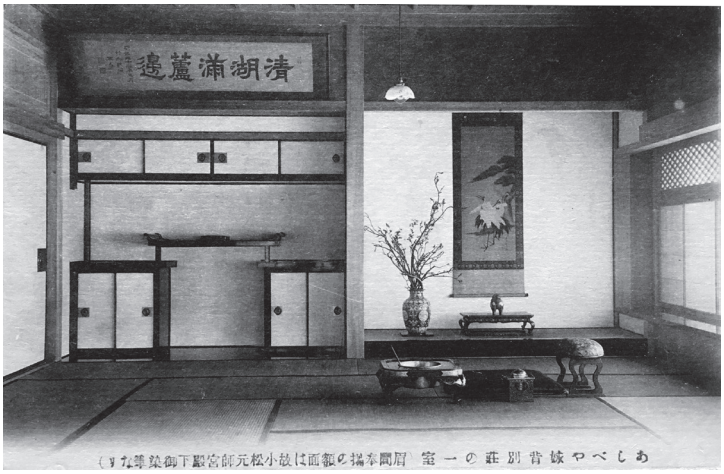


図8：変更前の東の間の床の状態

5、大亦観風について

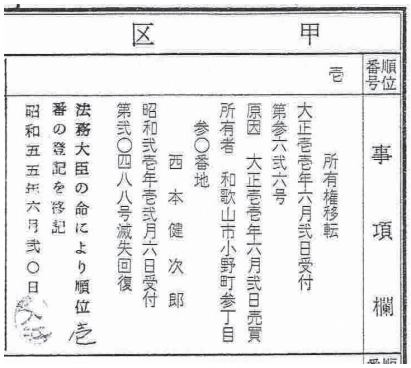
平成26（2014）年、和歌山県立近代美術館で行われた「生誕120年：大亦観風」展は、地元出身の画家を紹介する意欲的な展示であった。同展パンフレットの表紙を飾る「和歌浦二趣」（昭和12［1937］年）は、六曲一双の屏風の作品で、左雙「妹背の秋」、及び、右雙「紀三井寺の春」からなる。観風が柔らかな線を用いた南画的な表現を確立した時期の作で、内海を挟んで対峙する2つの場所を描くことで、まさに和歌の浦の内海を表わそうとしている。

大亦観風（本名：新治郎）は明治27（1894）年9月27日、和歌山市広瀬の油問屋に生まれた。

図９：大亦観風、妹背にて（個人蔵）

祖父の肖像を岩瀬広隆が描いている。和歌山県立近代美術館学芸員・奥村一郎氏から、あしべ屋妹背別荘で大亦観風を写した非常に珍しい写真に関する御教示があった。もともと奥座敷には西側と南側の二箇所に階段が取り付いていたが、この写真は失われた奥座敷西側の階段周りで写されていると思われる。前述のようにあしべ屋妹背別荘の奥座敷の築造は、大正２～６年以前になされた可能性がある。和歌の浦で大正期に築造された高欄を持つ建築は他に、琴の浦温山荘園浜座敷（大正２［1913］年。重要文化財）と岡崎邦輔別荘が現存する。温山荘園は合板を使用した先進的な建築であり、擬宝珠の意匠も欧州のアールデコを思わせる幾何学的形態を持つ。岡崎邦輔の別荘でも、温山荘園に見られるほどではないが、やはり単純化された擬宝珠が見られる。これらに比較してあしべ屋妹背別荘奥座敷に見られる擬宝珠は非常に古風な意匠であることに特徴がある。写真に見る擬宝珠は古典的なあしべ屋妹背別荘のものと酷似しており、図９の写真で右端に見える「昭和12年」「於和歌浦妹背」の書き込みを考え合わせれば、この写真の撮影場所は奥座敷西面の失われた階段の位置に相当すると考えてよいであろう。芸姑たちの名前も記されている。当時、あしべ屋妹背別荘はすでに初代西本健次郎の所有となっていた。大正年間に刊行された「社会画報」から、健次郎は「妹背別荘」の名称を残して展覧会や舞の発表会や歌会などに場所を提供していたことが知られたが[20]、昭和期前半の資料は少ない。観風は昭和13（1938）年11月に、東京白木屋で第３回の個展を行った折、「和歌浦二趣」を出品している。もともと短歌を読む歌人でもあったが、後年は画題を万葉集に求めていった。大亦観風は昭和22（1947）年に逝去し、大正７（1918）年から居住していた東京都目黒区の大円寺で葬儀が行われた。

６、あしべ屋妹背別荘と西本健次郎に関する資料



区　　甲

順位番号	事項欄
壱	
	所有権移転 大正壱壱年六月弐日受付 第参六弐六号 原因　大正壱壱年六月弐日売買 所有者　和歌山市小野町参丁目 参〇番地 西本健次郎 昭和弐壱年壱弐月六日受付 第弐〇四八八号滅失回復 法務大臣の命により順位壱番の登記を移記 昭和五五年六月弐〇日

図 10: あしべ屋妹背別荘の登記簿（部分）

あしべ屋妹背別荘の登記簿により、西本健次郎が大正11（1922）年６月１日にあしべ屋妹背別荘の建物の所有者となったことが知られた。あしべ屋は大正14（1925）年に廃業したことが伝えられている。その数年前に店主の藪清一郎から健次郎に譲られたと考えられる。

木造平屋建てのほぼ3分の1の部分を居宅として、残る3分の2を物置として登記していたことが判明した。居宅よりも物置の方が広いかたちで届がおこなわれた背景には、国有地にこの妹背別荘が立っていたことに起因するように思われる。

20　拙稿、平成 26（2014）年、p.112。社会画報による。「和歌浦二趣」右雙の右下に「於弱浦妹背山荘」の書込がある旨、奥村一郎氏より御教示頂いた。「妹背山荘」と「妹背別荘」は同一であると思われる。

7、まとめ

あしべ屋本店の姿を写すガラス製スライド写真の発見により、明治30年以前の様子が新たに加わった。この後、塀の意匠変更や、本店前の架台の設置などがあり、明治31～32年頃には３階建て部分中央の２階から直接地上に降りる階段を撤去して、その後、３階建て中央に破風を持つ２階建ての突出部を造り、明治中期から後半に見るあしべ屋本店は、数年おきに、より格上の姿へ、垣根の低い茶屋建築から、より内部空間化された旅館建築へと目まぐるしく改造を繰り返していったらしいことが、改めて認識された。

あしべ屋のスライド写真が、明治期に和歌の浦を題材とした舞踏戯曲を書いた坪内逍遥のコレクションの中に納められた経緯についてはまだよく判らないが、逍遥の日記など、明治20年以前の記録も今後渉猟したい。あしべ屋妹背別荘が初代西本健次郎の所有となって以降の利用について、昭和期前半の資料が見つかった。誤解を恐れずに言えば、芸術家の滞在式アトリエとしての今後の活用法の参考として留意される。

あしべ屋妹背別荘の奥座敷に関連した部材が見つかった点については、特に東の間の床の復元の手掛かりとして適切な方法で回収・整理することが望まれる。

『米虫日誌』にはあしべ屋妹背別荘の内観や本店周辺に関する新たな情報が含まれていた。ただし皇太子が明治36（1903）年10月9日に御搭乗になった軍艦について、「和歌山史要」（大正4［1915］年）では高砂ではなく浅間と記述されて異なっている点に留意しておく。今後も関係資料の渉猟を引続き行なっていきたい。

謝辞

本研究に当たり、坪内逍遥記念館のご協力に感謝する。川津彩可氏に心から感謝する。「米虫日誌」の掲載をご許可くださった郭家御当主・郭一彦様に感謝申し上げるとともに、明治期のあしべ屋妹背別荘の貴重なる記述を見出して下さった建築史家・西山修司先生に心から御礼を申し上げる。「あしべ節」の資料に関し、和歌山県教育庁生涯学習局・蘇理剛志氏、香川県立ミュージアムにお世話になった。画像提供に関して、紀国堂・溝端佳則氏に感謝申し上げる。最後に、和歌山県立美術館学芸員・奥村一郎氏、藤本真名美氏、和歌山県教育委員会生涯学習文化遺産課・仲辻慧大氏には貴重な情報の提供に深く感謝する。

参考文献

大村弘毅「敗軍の将　兵を語らず：坪内逍遥と長谷川時雨」、坪内逍遥研究資料 10、新樹社、昭和 56（1981）年。pp. 21-29。
岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠、明治 42（1909）年。
奥村一郎「大亦観風　生誕 120 年：2014 年 6 月 3 日－ 9 月 4 日」展覧会リーフレット、和歌山県立近代美術館、平成 26（2014）年。
郭嘉四郎「米虫日誌」日誌、郭一彦蔵。
「歌舞伎：昭和 2 年 3 月　雁治郎　幸四郎　合同号」第 3 年第 3 号、歌舞伎出版部、昭和 2（1922）年。
榊原悟「日本絵画の見方」角川選書 371、角川学芸出版、平成 16（2014）年。
塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛、明治 26（1893）年。
逍遥協会「坪内逍遥研究資料 1 ～ 16」新樹社、昭和 44（1969）年～平成 10（1998）年。

菅原正明「久遠の祈り：紀伊国神々の考古学２」清文堂、平成 14（2002）年。
田辺尚雄「不朽の名曲と称せる師の処女作」舞踏組曲「和歌の浦」ジャケット、ビクターレコード、昭和 50（1975）年。
坪内士行「『新曲浦島』から『長生新浦島』へ」、「坪内逍遥研究資料１」、新樹社、昭和 44（1969）年、pp. 15-17。
坪内逍遥「新楽劇論」、早稲田大学出版部、明治 37（1904）年。
坪内逍遥「日本舞踊の現在及び将来」、明治 40（1907）年、「逍遥選集３」、春陽堂、昭和２（1927）年、pp. 654-670。
坪内逍遥「未発表日記：浪花芸者」、「中央公論 804」、昭和 30（1955）年、pp. 254-263。
坪内逍遥「現代篇第一輯」日本戯曲全集 33、東京春陽堂、昭和４（1929）年。
坪内雄蔵「作と評論」早稲田大学出版部、明治 42（1909）年。
坪内雄蔵「それからそれ」実業之日本社、大正 10（1921）年。
藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版、平成５（1993）年。
松本金太郎「歌舞伎：昭和２年の思い出３月」、「歌舞伎」、第４年新年号、昭和３（1928）年、pp. 75-76。
吉田凞生「坪内逍遥と舞踏劇『和歌の浦』」舞踏組曲「和歌の浦」ジャケット、ビクターレコード、昭和 50（1975）年。
坪内逍遥記念館 HP、https://www.waseda.jp/enpaku/ex/2590/、閲覧：平成 28（2016）年 10 月 31 日。
土屋紳一・大久保遼・遠藤みゆき編「幻燈スライドの博物誌：プロジェクション・メディアの考古学」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、青弓社、平成 27（2015）年。
西本直子･西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」武蔵野大学環境研究所紀要２、平成 25（2013）年、pp. 77-93。
西本真一･西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要３、平成 26（2014）年、pp. 99-115。
西本真一･西本直子「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要５、平成 28（2016）年、pp. 105-112。
和歌山市編「和歌山史要」和歌山市役所、大正４（1915）年、pp. 144-146。
和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」、平成 22（2010）年。
渡辺裕「日本文化　モダン・ラプソディ」春秋社、平成 15（2003）年。
香川県立ミュージアム館蔵品データベース http://imapps.ne.jp/kpm/det.html?data id=39083、閲覧：平成２８（2016）年 12 月 17 日。
和歌祭公式サイト種目紹介 http://wakamatsuri.com/about/event-index.html、閲覧：平成 29（2017）年１月８日。

図版出典（特記なきは西本蔵）
図版２、及び３：早稲田大学・演劇博物館　デジタルアーカイブコレクション　幻燈
図版１：一部、溝端佳則氏蔵
図版９：個人蔵